

釣りに釣られて

高原英夫



## 第一回 「鯛の退院祝い」

翌週には、青森では「ねぶた祭」が始まるという暑い金曜日のことだった。街にはねぶた囃子が流れ、浮かれ華やいでいた。上司であるKさんは弘前から電車を通っていた。仕事を終え、

「ノド渴きましたね」

何年来の言わずもがなの、「ビールを一杯やりましょう」の合図をした。ところが  
である、

「今日は、ちよつと体具合が悪くて、悪いけど帰るじゃ」

いつになく強く断ってきた。仕方なくその日は、そのまま帰った。

日曜日の夕方電話が鳴り、向こうにはKさんがいた。

「あすの会議、キミがやってくれ。実は、ワ、癌だじゃ」

いきなりの話に聞き返しようがなかった。ぽつりぽつりと話を続けるうちに、食道を物が通らず、ついに水一滴も通らなくなり、救急車で運ばれ、そのまま検査入

院するとのことだった。社が主催するねぶた祭の最終日に花火大会がある。社内の関係者の最後の打ち合せ会議があるのだ。当然話は受けたのだが、

「でも、そうすぐ、そんな病名がわかるんですか」

やっと絞り出した言葉は、励ましても何ともいえない半端なものだった。

会議も終え、花火大会も無事終了した。

数日後には、弘前の入院先へ見舞いに向かった。ベッドにいたKさんは、戸川猪佐武著の「小説吉田学校」を読んでいたらしく、脇の机に伏せて置いてあった。その題名と病名があまりにかけ離れた別の物のように思えつつい本に目が向いた。

「最悪じゃ」

私を見るなりこう言うと、食道に玉子大の腫瘍があるということ、奥さんと説明を受けたことなど、話を続けた。

「看護婦さんが、一日一日大事にしてね、なんて、まるでワに明日もないような話しぶりをするのさ」

そして自分を励ますように、確認するように、

「座して死を待つより、打つて出る」

と、病気との闘いへの決意を語った。

十一月の中旬のある日、その日は午後一時から社員の結婚式が予定されていた。しかもこの日、二時半ごろには、Kさんが退院して東京から飛行機で戻る時間と重なっていた。東京の池袋の病院に転院し、十数時間にも及ぶ手術が成功し、声が出ていくようになってはいたがこの日帰ってくるのだ。

私はその前日の夜、竜飛の沖にいた。釣り仲間のNさんの手配で、この日、四人でタイを釣ろうとしていた。私は密かに退院祝いが釣れると思っていた。というのも一晩に十数匹もの、しかも五〜六十センチが大半という経験があり、タイの一匹ぐらいはまあ大丈夫と想っていたことは事実である。しかし、万が一を思い、

「誰か一番大きいのを釣ったら、私にください。実は…」

と、Kさんの退院祝いにしたい事を話すと、皆は心よく承諾してくれた。

船には明りが点き、すでにあたりは暗くなっていた。テンテンにイソメを、これでもかというほど房がけにし、釣り始めた。小泊からの北への下り潮にのり、竜飛

近くまでくる。それを何度も繰り返すというものだが、その日は何時間たつても、誰にもピクリともあたらなかつた。誰からともなく、

「今日はダメだな」という声が聞こえる。

テンテンが海の底を這うとき、コツコツと岩にあたり、それがあたかも魚の「食い」のように感じる時がある。食つたと思ひ、確実に針をかけようと、わずか数秒だが待つことがある。ところが大違ひで針ががちり岩にくいこみ、またテンテンが岩にはさまり、根がかりとなる。これを切るとなると、テグスが太いだけに一人では手に負えなくなり、船頭さんと呼んで切ってもらふことになる。

だが、時にドンコがかかつてくると、それは充分に底をとつている証だと、ぎりぎりまで底を探り続ける。そうしているうちに、私の竿にゴツゴツと当たりがあり、また岩か、と思ひながらも聞いてみると、底が浮いた。まさに底が浮いたのだ。

「タイだあ」

竿先がしなり、グーツ、グーツ、とタイが引いている。竿先が水面を何度も突き刺す。慎重に、慎重に上げていく。今日は絶対外せないのだ。

中頃まで来てまた思い切り引き始めた。鯛の三段引きとかいうのだそうだが、強烈そのものだ。ロッドキーパーに取り付けたすぐ根元から竿が海にしまっている。

そして船上の明りがタイの腹に反射しだした時に、興奮は最高潮となる。でかい。濃紺に緑を加えた深夜の海に、タイはとてつもなくでかく、強く、綺麗に見える。

海面での最期のあがきは意外と静かで、船頭さんがタモを出してくれ納まると、安堵感と達成感で、膝が震えているのがわかった。

腹ビレの縁が青く輝いている。竜飛の底から上がってきたタイだ。ちょうど大きさもいい。六十二センチある。

その晩は、結局、その一匹だけが四人の釣果だった。しかも私に。

深夜青森に戻り、妻を起こし、

「今日は結婚式だけど、途中で抜けて、空港に迎えに出るから、このタイを箱に入れて結婚式場へ到着の一時間前に迎えに来て」

私はすぐ床についた。妻は朝早くから起き出してタイを入れる箱を買いに出かけた。

結婚式は時間通りに始まった。だが、私が会場に居れるのは一時間位のものだった。私は中座し、妻と待ち合わせの時間には式場の玄関にいた。妻が着いた。見たことのない真赤なスーツ姿だった。

「どうしたんだ、そのスーツ」

「退院祝いにちようどいいと思って」

会場から空港へは三十分あまりだった。どんな姿で降りてくるのか、弘前で入院してからは四ヶ月、東京へ転院してからも三ヶ月が経っている。東京の病院へは電話を入れたこともあったのだが、喉の下から食道を切除していて、はじめは声が出なかった。それでも何とか絞り出すような声が出かかっていた。

空港には家族の人たちがワゴン車で迎えに来ていた。

到着となり、ガラスのドアの向こうに、娘さんに付き添われたKさんの姿が見えた。

出て来た。家族との再会を思い切り体で表わしていたが、やはりどこか弱々しく見えた。それはそうだろう、大変な闘病だったのだから。心の底からお祝いがした

かった。

「Kさん、退院おめでとうございます。昨晚竜飛で釣れたタイです」

蓋を開け、榎（さわら）で飾りつけたタイを見てもらいながらいった。Kさんは、目にうつつすら涙を浮かべていた。

「ワ、生きて青森の地を踏むとは思わなかった。いろいろありがとう」

その言葉だけで十分だった。Kさんたちはワゴン車に乗り込み、弘前へ向かった。

しかし、何というタイだろう。四人で釣って、たった一匹、しかも私に。

あとで、そのタイは親戚十数人の集まりに振舞われたと聞いた。

私の家には、その時のタイが写真になって大きく引き伸ばされ、飾られている。

どんなにたくさん釣った時よりも、どんな大きな魚をあげた時よりも、この時のタイはすべて最高の思い出となった。

平成22年11月